別3
60
1

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』 請求記号 本別3-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1

ガラス使用

国文学研究資料館
図書部

養　巻の名歌をえらび集めたる物語（源氏物語）の事にて、
作のもろもろの草子（冊子）のなかにすぐれたるを、
八十氏人（やそうじびと）などえらびあつめて、源氏ぬしに一巻ごとに一部ずつ九巻（ここのまき）
のまきものの表紙の裏うら巻より十九歳の三月（やよひ）までありあけの巻まで十九巻の四月より五月（さつき）
九巻の四月より五月の節会（せちえ）の内弁（うちのべん）をつとめ給ふまでの事なり。
受領（ずりょう）冷泉院の立坊（りっぽう）弘徽殿の大后（おほきさき）等の事ありて、
この注大略おなじ事ありて、
[illegible]

岡本藏書記

世中（よのなか）うらうらして　何（いか）　相童（あひわらは）の帯（おび）
をさゝせ給ふ也　細（こまか）に巻（まき）
より相童の巻をえらび出（いだ）して
ふるやうに書（かき）給ふ事（こと）
なり　細（こまか）に朱雀院（すざくいん）
代始（よはじめ）の儀式（ぎしき）
故（ゆゑ）よしなき事（こと）
なり　盃（さかづき）　相童（あひわらは）
のおび
[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

あさこかの娘共　細桃園乃
或ハ〻のおもひつゝよゐのねさめ
ゝさゝやかにて娘後あり
これ皇帥のゝくゝそゝとも
おく樓の名八幕ゝの人
のゝろゝ〻ゝの後
一ツの内ハ皇女ハ樓娘君と申
娘とゝ
ゝろゝとて人ゝゝ　元ほよ院の
びさゝゝゝゝねせゝろゝゝゝり
ゝゝゝゝゝゝねれりてゝゝと
人ゝハ対なゝと源の名越
あゝゝゝゝゝ　細養上の坐方
ゝハゝゝのゝとも源の後く
つて天院ゝゝゝよゝのゝゝ人
ーゝゝゝゝ

為ゝゝゝゝゝと八ゝれと
細沙皇帥のゝゝゝゝあゝ
なり面白ゝゝ云ゝなり
孟陽皇帥ハゝゝゝなり

歌流　河嵯峨天皇弘仁元
年置歌院司ハ皇女有智
内親王　女王　為斎王
定喜神事式ハ天皇即
位定賀茂太神斎王ハ仍簡
内親王未嫁者ト定ゝゝ
花今案歌院御後事ハト
定ありて五位ハのゝをゝて
みそゝゝゝゝゝゝ初
歌院ハ入ゝ初歌院ハ
のゝ服後或ハ近府ゝゝ
ゝゝてゝゝゝ二年潔
斎のゝゝ
ゝゝゝゝゝ　細弘徽殿の
御服ハ裏ハ濃ゝのゝ
かゝし人ゝゝゝ林ハ淺の
ハ服ゝゝゝゝゝ　細歌院
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

人うゝと　細　人うゝとゝうゝとハ行のすゑ人うゝと之雲人うゝと之雲と之
こをいの日　細　弘院とト定して二度の祓こゝうゝ花をもよ春の
四月よ陸社人より始えて二度めれ祓こゝうゝ花をもよ春の
うへうれをそうひてみは後のうあり初業秋の野のえ
うへうれを二度のゝうゝとゝうゝて中の間代日業祭の行へまりうあうて
ひうあうゝ毎年は祓八春年代日業を修をうゝ今女三度八相並の山門陸讓国のねト定
まて物祓陸へうあうゝ初なのゝうゝの事八代物祓よみゝとゝ今は業よりうゝ八野まゝ入うの
ひゝその二なめれゝうゝとうう。そ前八初なのゝうゝ
大納言中納言名代二人参議二人四位参位各四人凡て十二人の勅使よ
源氏大祓八参議二人の中ゝうゝ。これをひてうれ
きりのゝ
おゝしゝよゝうゝあう　細　人とうをゝ盃容貞笑雁かゝと勅使よゝうゝせ
下うゝのゝ　細　ゝうのそれの日八時装束ゝうゝ下襲表の袴をゝうゝ海ゝ用うゝ死海
後の日代物使云郷八装束をゝをゝるよ八唐鞋或八和鞋を用者業をひうゝ
うゝうゝさうゝせんうゝて　細　大祓供を例業るひゝ
之齊内親王臨時水修禊是月便入紫野斎月院勅大納言正三位兼行右近衛大将源朝臣
定監禊事ゝうゝ齊院御禊大将供奉例也
祓え車公つひゝうう　細　禊と別てうほゝうゝ医氏の云ゝの伝なゝ
なうゝ
一条の北ゝう　祓陀河原
おのふ通りおゝ大祓
大内裏の小の大祓うゝ
つゝ一度庶うゝ業

うゝのれありうゝ　細　初ゝ
の上八ゝおゝくゝてや
うのおゝ人年ゝ　細　まるよ
まて懐姓ゆゝ
さうゝせ
そやとのうゝう　今日の初
人とをゝうをうゝ
うゝう是そうゝ八まゝ
んとゝ

祓ゝそゝ人ゝよ
かのうゝをゝれうゝを
そうゝう

車のうゝ八ゝうゝ
うゝう祓奉の人ゝと
と重めうゝうゝなう

之川うゝうゝ人のそでうゝ　細　初紐之初元の袖口ゝん
人のおんなうゝ　細　業
うゝ。大厳よはうゝのれありうゝも
懐姓ゆゝ
ぬよれうゝうゝ八ゝやゝれば
ゝうゝを。わうゝ人ゝうゝそやとのうと
ゝうゝ。ゝうゝのびてこ修ゝんゝそゝえなうゝ　細　陸氏
のゝうゝ人よ八ゝの袖人よ八ゝ祓屋とゝそ八
ゝうゝ。ゝうゝのゝ　細　わうゝなうゝ
うゝ八ゝうゝ人ゝうゝそゝまうゝんゝうゝれば
のゝうゝやゝまゝうゝ　細　業
うゝ紙ゝ風ゝうゝ
ま
くうゝと。けうゝん
うゝと。大ゝうゝうゝ　細　業上の母ゝ
うゝと。大ゝうゝうゝ　細　母ゝ
うゝ。ゝうゝ毎人ゝうゝうゝ　細　西曲ゝ花よゝ　細　師ゝけうゝと

それ大分となりてはそくねみだれなどいふ心喩乃
さ間あり（くゝ）
人〳〵（ひと〳〵）　何人給 後園之部
持記有此名車ハ人結八葉形也 乾車ハ公方
より賜ぶられてそ人給ゆゑ人結とうづくる也 松
葉之形をなぞらへまろき形の車人ぐるまひく
てそくゝりとをいふ〳〵のそ
物車なとやりのかられてはもとゝしぬさ海くそれりも
わざとやつし忌ひまうとをやれ島帋とうていふく
さ一のまうな帋とれくゝにれ
行くゝひふくゝうんれのまよなりてそくゝ
しのへどゝとりのそ
落かゝるく
ぬしいへばさびよつ
のまくゝもゝ
おくねばまやつまるく
れくゝがうげみつねりをれみ

細出車ハ 孟 難車（なんしや）ハ 細 島帋のハ車の一面（ひとおもて）
（くゝ）
ハ島帋のハ車のうしろ
ハ島帋のハ車のうしろ
ハ半みすハ櫛と有（ゝ）りてくゝ
ハ島帋のハ車のうしろ
細 放埒の形
ハ島帋のハ車のうしろ
ハ島帋のハ車のうしろ
ハ島帋のハ車のうしろ
ハ島帋のハ車のうしろ
ハ島帋のハ車のうしろ
ハ島帋のハ車のうしろ

七

さと櫛とそくゝるかゝ後ハ 晴一面 女車ハ櫛を用ふのゝり
をくゝるり車のくゝ 車のくゝとハ轂（こしき）をゑ轂ハ車の輪（わ）とゝ
物又車ハ半とくゝるゝて櫛と轂をおゝるゝ事くゝ今ハ島帋
ゑまれ轂（こしき）ハ島帋の車ハ轂をおゝるゝてとくゝ
くゝのくゝおゝびに 細 引ゝげとゝぶゝんとくゝ 何くゝの事
乾をゞふゝん 花ゝとくゝゝんとくゝ
なりたのれ島帋の前ようけとのとみくゝし何のつまなくゝ
くゝをゝの方とハくゝるゝて給くゝさもりれをれゝんとも物
くゝ後く源氏のかゝもゝくゝゝりゝくゝゝ
ゝくれくゝゝゝくゝしなり 源氏のハ車とくゝをまくゝえてゝ
車よつにうゝも 車よくゝてゝり物又車ハつゝひゝきりとゝ
ゝくゝゝくゝゝ 細 源氏のハ車とくゝ 孟 源氏の四人の車とゝ
源氏のくゝくゝこまり
細源氏のハ車の人ハ葵上乃
源氏ハくゝとゝれをくゝゝゝ
ゝ帋くゝいゝく源氏ハ島帋ハ島帋
くゝくゝ給くゝ
とゝ車くゝれるゝ後
孟葵上の車の前と後簾
垂よゝゝくゝとゝくゝ源氏
ハ島帋ハ島帋
ハいゝくゝ孟ハ葵上乃

車だゝとてづけつまゞ
ハ島帋のハ車のうしろ
ゝ後くゝれて物りみくゝ
くゝ物みくゝゝやつまゝ
いくゝうねくゝさくゝとゝ
ゝくゝゝくゝゝゝ
ゝくゝゝくゝゝゝ
ゝくゝゝくゝゝ

みけしのこ　細れ鼠赤の生
也今日の条の御こ時赤生
赤の法式とハ赤の人の赤
法式ハさもりさこととも
又赤名院赤法式さそくめ
久多たんの赤をふよ
りて赤のさ礼年また
よわ〳〵ねえこ云紅のまふ
つもあやなる　花めものを
うつさうの文をそやう
なくふ　法花経巻集後程新
紙紫こ綿とみるとこしし
とめさあやまそれこ法花
ひめもあやハあやなきふ紅
紫のろこをそうこふう
ろへ〳〵

ふ将のうの法身は　河
法身ハうふ其目ろ生
云ふく　花此字才不歌義
こ依称みもあるれも
うの法身とハ一負も
るふくふ　こ法のお監物
曹府生と一人つうらそ
ふうこくこ

つうまれ法身を法ハくうあうて西位のさびよ
一人つうこととうの法身とふく他令納言のさ
とこ云ふ人の法身をゆうされてかくふこ共とは称賛命
具をろと一負ともうの法身ともつみくうまもみる法
上の差人のお監をつハそれと一負は具をろこハ倒ろ
監物曹々本陣は供なもろよりてうこの一負は
ふ一法の河ふ法ふこともや列は行ろもへ〳〵
法氏ろおとふ人ふあよふ此事ふ　時口伝ふ法師殿
監を兼安の人也　細花色ニ法氏才二の頼をふこと表ふこ
況や殿上の差人をこうまんなろふく
石近差人のそう　細砂踏
の荻の花才ふ　師伊与ふ
みせ法よ次ハ人法のこう
へまふ河ニ法ハ供ふそふ
うねこをいまん　おたの
ふうの私の法身ともく
やふ出ふそろく是昭記
下ふり
木まとなりぬハ　河　論語
日君子之徳風小人之徳ハ
草尚之風必偃師云尚ニ
作上加也
ろさうろく　孟　後成ニ女院ニ
云市女笠とうとぎぬ云

なうあぎろ
（真名）
くげものこえこ
さ祝ぞいろくへ
（心）
のふ女房をこうふ
うろこそ
（法氏のお迎）
うのぞふ
ふんけふ
（法なの元の
ぶとぜ
（法）
さうあぎくふ
のめうさ海つこそう
（西面ニ人こ）
なうみを上
（物役のふう）
のめうさ
ふいねのこみをめ
（ふ）
のめうさ

（法氏のこ）
（お川息所の車
（法氏のこ）
（お川息所のふうふ）
（法氏のこ）
（法氏のこ）
（法氏のこ

うち女をつかさうそくとつふとろく（仮日）孟津よつて（仮）
ちく（仮）衣つかねうとはおもふ小袖のすへのあれつまとねて（仮）
檜皮紙よこうろくりのつかさくちくちくち

とけちらくと八枚ねりかさねる
種の具女なんどもそしんじ引墨
れわらべなんどもおりくる
細長上らうこのすくみ
をうてゆくよなきまち
らくおれもおほ具のの
あらひへろひろくてゆり
しみよまるとそよく
と洗ひてるうのうも菜
ねりらくへ時々食后の物
風とのさまり
こりくなりも 養ハ
くうよれ具をれてたゆう
よせんとハやすふまりれた
日比ゆうの中よりひとあり
つをりのともちりねを
そのれ公ようしいてゆくの
かたようねんくのちす
ちんとく
斎会のまさりのあよ
細ト定め、ゆ具のた
さよ入給へきをさうすす
そて来りこの六条帝位
のうえよおつまりてとく時司

花廻喜式云定伊勢太神宮之齋王仍筒内親王未嫁者詫即遣勅使於彼家告事
由神祇祐以上一人率僚下随勅使共向上部解除神部以木綿着賢木立殿四面及
内外門今案秋好中宮ゑん去年ト定ありて未給日へ入給ひてそのよりくて祓服木とまうく
林のそぐりに 細布ゆとて財布ゆうこ 何林八日本紀よ
久山の下陰りに林の綾木ゆくに林の実八月分の作り方く詫
とりとは
ほのかよれ具のをを具
ーてかり
るそやうくくこころ
細具今財布ゆうをそり
ほのかく細養もの具
とかり

ささいつきまく 味酒かり
菜のとと同車してゆこに
あんとのふく

ひろうそくさしてまろく贄をさきわるさまなどのびくよなんどしてこのそろを　細 暦博士 推古天皇十二年甲子正月戊午朔始用暦ノまゐ女房いてねとてゐ　仰 ま女房いてゐてまゐやとのひ入いてねとのうへ居童のうとぎれてのそろくおられそ紙の方ゝ女房さらとありかゝりてあそろうとゝ仰給そろ御ゝ　細 今日八講も女車みくあり給へさゝ

うさりんのうへのそろ御　細 童女のとりつくろひ向そろ中花をよみてさりけり　河 落線歟のそろ御ゝわらはのそろ御そろ菜の巻ゝこもわりそろ　細 西夫ゝ女親王對面時ゝ總角者着汗杉半臂下襲表袴ゝ玉帯等ノ又齊宮齊院童女者總角青麹塵汗杉半臂下裏表袴自

なでまひて、ひうそくさしてまろく贄をさきわるさまなどのびくよなんどしてこのそろを　細 推古天皇十二年甲子正月戊午朔始用暦ノまゐ女房いてねとてゐ　仰 ま女房いてゐてまゐやとのうへ居童のうとぎれてのそろくおられそ紙の方ゝ女房さらとありかゝりてあそろうとゝ仰給そろ御ゝ　細 今日八講も女車みくあり給へさゝ

うさりんのうへのそろ御　細 童女のとりつくろひ向そろ中花をよみてさりけり　河 落線歟のそろ御ゝわらはのそろ御そろ菜の巻ゝこもわりそろ　細 西夫ゝ女親王對面時ゝ總角者着汗杉半臂下襲表袴ゝ玉帯等ノ又齊宮齊院童女者總角青麹塵汗杉半臂下裏表袴自

柳帯　今案童女晴時ゝ袴上表袴とそろうさ文第ニ數ゝ世の常ニハ表袴不着ゐと

そろうさ　細 紀ニ汙海の流ゝ也ゐうへ死の奥ニハ海松と申そ死そうゝ十二髪のうへ

そろうさそろくとつくろひそろ盃髪そろの調ゝ髪の中ニ海松と二ふさゝ入ゐとあり　碁盤　嵯峨海松　青月の石ニ垂之也　ゐ　と御髪ニよそろくさそろ也　ゐ　御の名ニ尋と注ひろ人ニ付て定なきゆへ

ふをみちの極ニまでしてゐ嘉の海ニも生なりて注り　細 ハ洲のふさ

ゐなきとりの巣ニ入ゐ　細 河 左ゐ仏陽ハ一条西洞院ニ在ゐ仏陽ハ一条ニ在ゐ

子尋 髪のうへ　ゐと注ひろ人ゐ

ひろうそくさしてまろく贄をさきわるさまなどのびくよなんどしてこのそろを　細 推古天皇十二年甲子正月戊午朔始用暦ノまゐ女房いてねとてゐ　仰 ま女房いてゐてまゐやとのうへ居童のうとぎれてのそろくおられそ紙の方ゝ女房さらとありかゝりてあそろうとゝ仰給そろ御ゝ　細 今日八講も女車みくあり給へさゝ

うさりんのうへのそろ御　細 童女のとりつくろひ向そろ中花をよみてさりけり　河 落線歟のそろ御ゝわらはのそろ御そろ菜の巻ゝこもわりそろ　細 西夫ゝ女親王對面時ゝ總角者着汗杉半臂下襲表袴ゝ玉帯等ノ又齊宮齊院童女者總角青麹塵汗杉半臂下裏表袴自

髪上所

ゐ　細 そろ物ゝ車の多ニ御ゝ　車を　仰 氏のゝ　毛 原内侍ゝ　扇を

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1

ガラス使用

神のこめろくや　細　山の井のめろくあろ泡よしやろくごろてる月を
さろてころべしさてみてころあとい布絵ほんの山志のあろりねゆへ
行よそのへろ　細ほの方し駱若　源氏方　葵の姫方
あろころや　細ほの方し駱若　源氏の足ろ月　葵の姫方
の女と色加　源氏の足ろ月　葵の姫方
ときろつまて山月もひろふ
ろりの志ちよく云ふそろろ
よ山神めろくとあろ源氏の殿
きめへくとれ山神ろろよふわ
ろろと処もめろくとく侍筋物
語の駱若のへ　細　河海よ大厳
若ろり　細　大鏡のひろへ号を
多ろてもりへ云ひとろもりろ
ふて葵上のろへ紙ひまふ
列て山雅者をろへ云ひろ也
暁ろろ〳〵多ろてけるとも
ひろねろ〳〵字句列ふやろ
けろねいろろ〳〵ろ
ふりれてろ〳〵
故父母ろへの　細　河海よ大厳
の女房のろへろへあまま
多ろりや行をろ従父方ろ
山月帝の父君の死霊ろ云
ろろろ処欲臭幸敦生宇

治の宿由月をまよ歩給ふ　栗花物語巻第十二ありり
咲　六山月帝の臭あ又山月帝
の父分居の臭なくなくろ
ひろへ
月ひろろのかわろ月れとの
ろ月あろてへとをろ
いふろねろへ
ひろふよろと　車の帰あ
きひの迷根松をまろへと
ろ志のろ川ふねへ
ふろとろまろねへ
細　志ふ帝のまろへ給何ら
やろの表さろへ姫君
山養よへ御前よさりやと
恥ろまろへろもあろ
とのろへれへの伸へ　河　稲幸
ふそへいろさ　血いろしろ称へ細いろ
ろいひあろへろへ文字の選
男をもてへや　河別をもて
いろやへ山ろへやろりあろお
ひろろろへ　孟細日
ろ川へごろ　細河ろ云ろ
釈公方

をいろろさへろへのおろりよ人の　細白車あ
らへひへ
抱よろへかをろ
ふりよろへ
ひまろへろ給夢　中
人のひてろへらめ
ろへひさまろへ　ろへ
ろへ　河ひやへろへ
いろさふろへろへ
なへへへ給へ
ろへ山月帝
ろへ別をろ給あ
へへぶよ人のひへ　よさイ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

（朱）「日本紀」

（朱）「万葉」

（朱）「和名抄」

（朱）「令義解」

（朱）「令集解」

（朱）「令義解」

（朱）「令集解」

（朱）「令義解」

（朱）「令集解

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

まの法ゆるそしも
大宮前よもそ〳〵退まか
りわり今参地えやと
ろあれゆなどりてそう
ろくりろ〳〵 血栄花物
語よ一条院の母后三条院
よりわれろることをと
ろよいろ〳〵ゆりてもはて
てあればゆそでにきり
めてんりわり法ゆとい地る
ものこと〳〵

山の座も 細義真和尚天
長元年六月十二日始補
天台座主 号依怙大師

いまいろりともと
物参もそや別のすあり
とくろのろり 細誕生の真
まりのけろあり 細三ケ夜よ
七夜のほうなろ〳〵れ
記内則篇云 國君世子生
告于君接以大牢注云接
讀為捷勝也謂食其母
使補虚強乳也又左傳稽
公六年傳曰九月丁卯
子商生以太子生之礼挙
之接以大牢
孫〳〵そそ人 細家を男
そしちろ参法ろ〳〵
りて面ろ〳〵とろ。
ろ〳〵ろりもろこと
細ばそのさ郷こなく要

（かんゆる子のこ海よ似ろこと）
ろ〳〵れなろ法のりろこ海よおわこ海（ほそ）
ろ〳〵り。人〳〵ちろ〳〵まいろもろこと（ほのそよこと）
ろ〳〵ろ〳〵ばろ〳〵（養の祝なのひやひやろれいく）
まれいもよ地ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

いつるひうちとくこと

はなんとくでおれらうそねひてれ
の病中の事をも
うげるくの
きうかくこの音なのてみてるこ聞いて
らくげよくりぬ
ありぐきやまてそれれいそにるとあっ
ぬこわりてやりひつくんとものやちこやで
よりつくそてもとくつとくこれ法院などよまりてくく
まそなんぐやうめくつるくこ
まくべくわれうべくる秋の津とやとる
よりくやとつくそてもとくつとくこ
とねやくくふづうくぐーのて倒のれ

おりりく細毋のおもり
よきうさんのやこにあり
くひまをいかく師大きの養
よおうひきそくくそれ始
よ大くさいはこくとはそ
依るさとの事のくく大
ハかいなとふうう
つくりめくくめ終く
細養上の添よ同をくめ
て足参終く呼養上の添
氏をみ又終さ先妻
秋のほうくめ紀八月く
後同を任をを東宮除
同くく。涂同天武四年
三月より始。師春の涂間
を賜ふ。美いひのて
和宮くそ小國の号み
掃同さてを任せくう
あよおぐくめくう妹
の涂同を東宮とねね
とをよおう後司を任
をくうくおを同をる

おー形よくてそいぞてのくへ
くくまくてりの終そなどとそそとき
まりまへてくいくくもいさくらものぞそ終る
ぐもおりてをくくそのりぬ
みるつぐさ
やるり終よ
てくいくまぐひ終ぶくそのりぬ
こくくく終ほどりるくくそのりぬ
とそくくれもくくまそ終ぬれて。

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

なのめよろこぶ　細字
比許てうり盃只さすの
みさへあるよしく
油のうへのむらくも
細くぐひきさそへる
不知火の奥入江非本文おきつ
空之袖上珊瑚こそあれ
玉咲かりみなへし
すくよかにみ
おもひのふかくうるはし
盃原ふりをうるはしの
のきの不知火女の集
のはる　細八月より諸司に
入まつさきに中に大内の
依日人のつさと廻りて
をそくまいりの日入まつ
みくれてやありしそ
あるへうさ河九衛門府ハ
近衛以下壮絵以勅禮
屋にそあり狩衣
細ふかく濃
紅さよかり
紋なるふさ内蔵
野紫紋ふ仰ハ深菱の服
あるへいとく

うとそひまこみ
おうとそひまこみ文市
門のに位さうふるなと
ふ前よも世の中うりてのち
ちくろ川柏うちおりれあ
玉原の向くさふに世とうき
柏よ柏うりうふ菱の既まし
ふひに皇ホたものてつ
ていふくいとうふ
とうこをあれ　細河ともあれ
特やふ人乃別ふさうふ新
宝よるおうこうも何時
しもあれ特やふ今別さ
おうとうこうにもうを
会仏の暁う
信うをおもり

風のとくふ多ふてうふ
細吹れ旬ふもうふ秋
也とう　なうさ柏とうふ
ふ河海よひふまいれ

てていとうくなりて　細多方うふ
そつぐうまうひ　盃ねぐはうさ海ふもなり
るそうとはをよかひさいの姫ふれう
くくそりのひ　おほ
のふうふ　ねがひ　廿房
うふのよふのふ
ふとねざめがふ
ぶりそうひまふ
なで西びうふ　細引ふる手及而ふる
ひふ風の香男よもうふうとうふ
れをうふひまふ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

の奇ありともいよ〳〵哀
のふるうんやうろ〳〵
男よさもひく林のさ東風吹
立よりみ〳〵人の袂よさ
てみるとあくれなるふさ
まや 呼田
菊のうへにそろ 細 壽と
そり 哦 かけ〳〵ふ
なりて〳〵
こゝろあをみへの 細 たゞの
こゝろく菊のそれとよ哀
るなりて〳〵 哦 花田
帝のまへにく服共のう
えの紙乃文と
さ〳〵亜ていよあり 称名
院は侘さまをそいよりう
とハは皇帝うのみれ
しゆりくもくさ毛服
をいそてさまをさうま
盃日
こゝろくねそとハ 称名院は
院にこゝろくねそくいとは
称名のきよまりくり
て為りぬと云文の御

さて係のかうもく〳〵に為〳〵
めしね給を文の御し係帝皇帝は給をそ
れ分うとくく〳〵給よとひのふうくるれとそ
又やさ給
人の世を お蓑のうへとは皇帝の云男よりて
〳〵今のやよひのあまりくうん 細 皇帝
るづ〳〵ひのどりく〳〵はうをおまうひもく
さそうよ亜ぐう 細 との御うはあくうのう
うれるのかとうひやと 細 とのれ云〳〵を
て只今〳〵ひさそく
るめくまうをこゝみくと
盃杯の事代ことそも
細 そやうよさをまの最よ出
ま〳〵とそうこくく人倫よ
て出べき物とかいふ
〳〵
奇文のれうよまうり
細 と奇文い一給の称事
なりよ依ては称安うり
文をまつ〳〵とうるまも出
夕とはのあくひ給も

わ給を取うりて事伝ふうく
けのうりわうれうよこくのうへれだあう
えぐよ。こゝろあびのくとなうみこつけ
てさ〳〵をそいよう。いまめ〳〵うもとて
こまへばくやをふ茶のはまなり。雪ね給と物
哦 菊よりせ〳〵り 細 河 係を決
人の世をあくれとうても参けさよやく
係 帝皇方
とひこそや出。こで今のそよそひ
係は皇帝のまをそのうく生給
多給よくとくとそうひもとて
行く〳〵人のはのくらぬべきこと 称

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

花中招云ハ姉妹の歌三月廿九日也絶句
友を思ふ 虎文移花 雨為雲今不知友顔 鄭生襄王 夢
河雄橋 日本紀雄 お叶それの夢もそ
令楼中初見時 武昌春柳似腰支 相逢相失路如 劉禹錫
微女帥媿 遂暮雲帰只應長在 漢湯渡化作 鴛鴦飛
楽天同時之人也思人よそふれて作る詩也
を似て化ける仙し高唐賦序云昔先王嘗 河有昵二首 劉夢得庚
之女也為高唐之客聞君游高唐願薦枕席 王因幸之去而辞曰妾在巫山之陽高丘
之岨旦為朝雲暮為行雨朝朝暮暮陽臺下 且朝視如言下畧 或本云旦為朝雲暮為神
女賦よありとて用ゐるのそう神女賦よ其詞 不審 愚案
まそいふそなくそうん女の 孟文順
我心のそうぬ事 おう
ーと中るのそうめーさ
ふくそ 細流を視 あ
ひもうらや
ひもの枝しそうな葉てね久
さべーとそり松氏まるの
そく雨雪降よりつてうひ
降ふ雨るう仰れのそう
きてけるさ降るう
つてうのくまで衣の入ひも
そうりをき降うぬへー

赤橋のそう
みのさそやうなりつ秋のこと
細白を切へーとそめ雲生
いりつともよ大四山の雪
の叶のそう赤橋よ逢
ひーけのそうきこそ
月よ孟和の源氏とも
弱そうし幸隆の文
そのそう卯赤橋よ逢
ひの秋のそれ被き
そひの月とそれしまのを
そ降ふひし秋のそうとも
秋のこそと 細赤橋寒
降綱よ孟和のれわそ
けりうるとそうまーけ
のそうにそうるもの
くふへー暁盃月
そうれうーて 細先ハ
他日のそう十月の嫩くの
まこ暁 又一降こ工の雨を
同用のそうこう仏へう
ー盃月
中招君ハ姉妹の歌よ絶句の意よ云ふ

孟文順
我心のそうぬ事 おう
ーと中るのそうめーさ
ふくそ 細流を視 あ
ひもうらや
ひもの枝しそうな葉てね久
さべーとそり松氏まるの
そく雨雪降よりつてうひ
降ふ雨るう仰れのそう
きてけるさ降るう
つてうのくまで衣の入ひも
そうりをき降うぬへー

赤橋のそう
みのさそやうなりつ秋のこと
細白を切へーとそめ雲生
いりつともよ大四山の雪
の叶のそう赤橋よ逢
ひーけのそうきこそ
月よ孟和の源氏とも
弱そうし幸隆の文
そのそう卯赤橋よ逢
ひの秋のそれ被き
そひの月とそれしまのを
そ降ふひし秋のそうとも
秋のこそと 細赤橋寒
降綱よ孟和のれわそ
けりうるとそうまーけ
のそうにそうるもの
くふへー暁盃月
そうれうーて 細先ハ
他日のそう十月の嫩くの
まこ暁 又一降こ工の雨を
同用のそうこう仏へう
ー盃月
中招君ハ姉妹の歌よ絶句の意よ云ふ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』 請求記号 本別3-1
ガラス使用

行くすゑの中に
細はぎ面白く中絶のさまふ
給そへたるあんばいなどもいとおもしろし
盃は亭主勝手に見こす十月
つごもりのころ夜をかけて人の
もとへ行くとて
君かこと忘れぬ袖の
とこ夜よりつゆ時雨
降るれの盃々毎を菱乃
形ふようとかたり給
ひ花紅葉うれハ菱のも
とへこハ夕毎へ行もて
こハ夕毎へ行もて秋菱の
うれ
うらひやそうそや 細菱上
うらハ白そうそうそ夕
毎とハ給らめこと後給
遠夜備か武郎の内ね
ゆくひやそうそうとの給ふ
とうとく 松島武郎
とうめもて作とふ

うんこハ酒うんこうんこ 唯 夕毎ハ
本ふうんあり 細花毎の菱花吹毎の手染の
ゆや菊吹毎の手染の日よりとうとくうんこうんこ我
つごもりの日よりとうとくうんこうんこ我
ゆくひやそうそうとの給ふ
とうとく 松島武郎
とうめもて作とふ

うんこハ酒うんこうんこ 唯 夕毎ハ
本ふうんあり 細花毎の菱花吹毎の手染の
ゆや菊吹毎の手染の日よりとうとくうんこうんこ我
つごもりの日よりとうとくうんこうんこ我
ゆくひやそうそうとの給ふ
とうとく 松島武郎
とうめもて作とふ

うんこハ酒うんこうんこ 唯 夕毎ハ
本ふうんあり 細花毎の菱花吹毎の手染の
ゆや菊吹毎の手染の日よりとうとくうんこうんこ我
つごもりの日よりとうとくうんこうんこ我
ゆくひやそうそうとの給ふ
とうとく 松島武郎
とうめもて作とふ

うんこハ酒うんこうんこ 唯 夕毎ハ
本ふうんあり 細花毎の菱花吹毎の手染の
ゆや菊吹毎の手染の日よりとうとくうんこうんこ我
つごもりの日よりとうとくうんこうんこ我
ゆくひやそうそうとの給ふ
とうとく 松島武郎
とうめもて作とふ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

それは出給をさすらしまうしの権をとうつまりねやの
うれたく式権の姫君のつまさ物うくわくのさうし
みて寄みをあらはさのよりつまうしあひてそうやと
ぬかりあり
わうそこの 細下の白襲を
ようけてそうらうしく帥式部卿
狂ふうらうしく帥式部卿
の蔵人の姫君をよ
給へるふべきうまいわ
うねこれわれ蔵人の権少将
それの自然よをかをこ
りうそ
いうを阿倍の 細後月のつ
帥殿の 阿倍の 細後月のつ
河後月を阿倍のう
へうそ細ひうわり
へおうそ
出てうどのいくうて
細ふとうき内つ原と
くうけてく夫給し
ふうらうしを 細色上
の頭人をを後大納言
大内のうへ右の直衣
をうよとき又は亭の院

仁和寺の大内山とうあよおうまり時院中納言
よ学うれて南山とむへまりのうとく後一条
おおうそよ細色上二枚いう重ねて今宵の
名にしく 細色上
よのうをやうれもの中をいう
秋きうよ 細養上をとうれうこ帥殿
うう阿倍うもいうて体のうまうまう
と養の姫君のやうよ常うれは権のうれ
なよとうまうく
細体のうたうのうと
もをうつ多給し六条
皇女なとをいまうれうる
みを又四位のあうとと
乃よ常うるうし時雨
つうさんしうもし
男権又は左衛門のとと
をうくの給ふうき
人をうれうはいうれら
よとうそうそうこと
りおし 細雨日おあよ
くなうるよのうまう体
のうをれ
行央うをうて 細阿倍
うの新くし世界の交ふ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1

ガラス使用

ふみこころみ（秋）菱のゆくすゑなどそれとも陸奥（みちのく）にてうみ（産）
（ま）ふけてうちなげかれて（細呼）（ひ）（秋）（令）
ふるし（細雪）（ふ）ふりなどめ給へるに
もし（源）盃よいかにそやとそゝめきあへるに
もろみ（諸見）られてそゆかしき
このうち（源）ぬれ（菱）ものまくらいとゞ（菱）心ほそげ（菱）よもすがら
（源）わびつゝ（菱）ねてらうたげ（細菱）ちいさわらは
の（菱）ゆやたもとくいとゞ心ほそげ（菱）に
（源）ものおもひ（菱）つゞけ（菱）ながめ（菱）ふし（菱）
（源）給へ（菱）ておはしまさ（菱）ねばとて（菱）
（源）ふしまろび（菱）給へ（菱）ど（菱）
（源）かひなし（菱）
（源）ものまくらいとゞ（菱）
（源）ぬれ（菱）まさ（菱）りて（菱）
（源）ものおもひ（菱）つゞけ（菱）ながめ（菱）ふし（菱）
（源）給へ（菱）ておはしまさ（菱）ねばとて（菱）
（源）ふしまろび（菱）給へ（菱）ど（菱）
（源）かひなし（菱）

（菱）盃（さかづき）
（源）おもふ（菱）
（源）ふし（菱）
（源）ぬれ（菱）
（源）ふし（菱）
（源）ぬれ（菱）
（源）ふし（菱）
（源）ぬれ（菱）

（菱）菱の表女（うへをんな）
（源）ふし（菱）
（源）ぬれ（菱）
（源）ふし（菱）
（源）ぬれ（菱）
（源）ふし（菱）
（源）ぬれ（菱）

（菱）菱の御方（おんかた

よりひのつりよりはさまをおろしさ（細）仰大将のうへの御袖のうへよりさしかけたるやうにて御ぐしのはしをすこしかきやりてうちみしろきたるやうにて

ふるき枕ふるき夜
細 文集中十二 長恨歌 驚鴈至冷露花重舊枕故衾誰與共 眞 同長恨哥 唐本ニハ多分題翠衾寒誰与共トアリ舊枕古衾トもアリ 和名ノ袋ノヤウナルヲイフ又云古文眞寶ニハ翡翠衾寒誰与共ト 白氏文集才十二唐本ヲ引勘ルニ但枕古衾誰与共去ト叫ニ源氏心也 永正七七 十二記ス

ふるさとゝそ 幷 源氏の氏女をおくれおくるゝ心ちにも
ま七縄とそ 細 源のみの切ゐうをいふ源の
と住荒れ 彼妻との縄もさゝめくくれてさくらんとも
外戚宣さと 花多かる春ま木ものみの千とりてひものふかきさまの
ふるさとゝそ 細 上の句よりうけて下の
なり 幷 盃同
ふるひるさとゝは
細 妻上のみ心考乃
智にて妻のうへをいふ
とおもふく歎ひとるれど 常業
もとゝもれハ名のみ
名情のあく 枕にて
ふるさとゝ作る

声をもてわかるゝもかなしかるへき事よりもまさりて 細 とこ夜と床は男女と云字の傷を妬よ離れよう阿と也ひやうしき二首ハ久集の二句を引てしらぬ今こゝ今まてと云ふるさとゝ作 古義同妻の心ゝ一首妻仏あるふるさとゝ長恨哥よりいへるにや 細 上の句よりうけて下の
ふるひるさとゝは 幷 盃同
細 妻上のみ心考乃
智にて妻のうへをいふ
とおもふく歎ひとるれど 常業
もとゝもれハ名のみ
名情のあく 枕にて
ふるさとゝ作る

このふるさとゝは
細 源をいふそのおよう
作るなり

やまとのもとゝけ 草 真
みもすそ 細 源のまねとる
つゝこの 細 芳野
めをくべよ
さかるべし
ふりみふらぬ 源
なさゝめ
ぐんこさんるひよ 久 霜のおもそうとも
ふるさとゝそ
ふるひるさとゝは
細 妻上のみ心考乃
智にて妻のうへをいふ
とおもふく歎ひとるれど 常業
もとゝもれハ名のみ
名情のあく 枕にて
ふるさとゝ作る

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1
ガラス使用

なりて
細小袖出でくる
呼同
うちぬるよりあり
仰 常よりも着垂れ源の
今は赤れ萎のよ
うにて紅袖をぬ
ひんのうへのきり
也 袍 細 胜服
縫 冬小袖 袍 裏 穀 冬 半
文 文 袍 裳 服
も無紋 着 服 さ
まれるうへ 呼 同 文 冠 其 模 多
一巻 文 の冠 八 文 羅 男
服 表 八 無 文 の羅 と 男
亟 同
これもくらくをさけ
さうじ 呼 源氏の心
ぐるまをうち給ふ
ても髪上の方にとまり
しんぐのうをやり給
ひ

世をそうつ 心ひかれ ぬまくらぐれしも.
ひくのおもうそくなぐさめ給ふ
ぐすまでをして 呼 ぬりぶたにあれも
しきうへくらぐしげなり.
無紋袍 ひんのうへの 細 冷泉院
ね.えいまきもの 縫 巻
やうるれいそひ 源氏
ちまうち髪ぐ
ぐ 見給ふ
ぞまで給ふ二条院
ぐそ 呼 ぐ
たうれまうのぐ

ぞさけさうぞ 届
のおなじうむぐ
表よやひあ
細 二条院西の対 仰
くへてお
これつひうり
ときわうへ
とくのてゆ 給ふ
ろくそうめ
うりうりう
ひびよくれそ
ぐくそまう

のおうちをつけても
細 髪上の女房達の
ぬりしそく
これさうぞくなり
細 紅色の二つ引重
八月九月十月までこれ
涂服 給へ 呼 涂服いれら
給ひて 呼 源氏の仰
ぐ衣裳 呼 服
ぬりぬ給へ
衣のいろひ
河十月更衣の 仰 装束の方の流 二条院
給へ
お袖をうちそへ
細 ぬりのうちひな
ぐりてさしかくお袖を
紙包にうちそへ源の君
ぬる

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1
ガラス使用

ううどくふくわらで
河支のよの餅はふるくや
白日朝の餅はふるくやふるれ
ば粉くよはわらでとうふ
ふはいふまめくいさ
細南座のまぎうろよ
のうのかうふしき支の見
童日ふれはふ
ぼまあいぎふうのうでめはは
えうりして
細先も惟光とう会てや
やはまくいさ日との絵
しとうけくうふが疫敬
仲之惟光新枕のふをい
へいふ
ふりうけり細
ニケのうち
の一ケり 畔 三死一ケもち
ちむ説あうとうふ居
別よあり死嫁娶のこ
日よあうう新餅と枕が
こよをうくうい短ようよう
めうふ人の死せうませ
惟よ先餅と供もうち

ふ枕づくえとうりうれはうううくいさ
家人珍うまうれば傍老同穴の契となうひ
いか女は支の家と我家と思ふこうう餅と用う
うふりより嫁娶の日ろうさ衣裳などと用う
ふよふふいあやまれうもや我枕うふ別よもう
ふもふふ 細惟光やそふやて支とやうれ
ふうふうもやと供やう

のふうふうううるあい
れ 盃餐に別て今い
家よううふうが新枕の
うふも家を類のうくやや
ずが今い一枕も陽久す
のうううさをうふくふう
よと支やひのまうふと
我ふうよ係のや系ふ血
師形の枕よ日
思ひていうう私ふて
お惟光ふひまうとを云ひ
て私ふうて私ふ人を
あうふ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1
ガラス使用

うこのこと、河内(かう)香壺(つぼ)圖
或ハ香粉圖 香壺のおもハさ
ざまなる調(とゝの)へ 諸(もろ)香を
入る器(うつわ)物 梅(むめ)枝の巻よ
りうつくしきと一様(さま)ごと
に渭(ゐ)り三日(みか)秘伝(ひでん)とかや
とりてまつりもんもあ
れのやうにもそうなり

さてこよひまいるべき
所(ところ)多(おほ)き御(ご)ことなり 今(いま)は
おごそかなるやうにてそ
るまじきさまハ 花(はな)宴(えん)
惟光(これみつ)の源(げん)氏(じ)へ
弁(べん)の惟光(これみつ)への
どもいとおもしろ
きまでもてなしたり
惟光(これみつ)への色(いろ)ごと
はさるものにて
とりわきて人(ひと)
ものおもひ
なぐさめ
ぬべき
ほどの
ことを
ぞ
いひ
つゞけ
たる
うちに
人(ひと)
ゝえ
もこ
ぬよ
うに
そ

うんとおりひやう(ひやう)
の弁(べん)とゝみをよび(よび)
せもの(もの)へとそ(そ)
うこのこと(こと)
いもひのもれ(れ)
どどうへ(うへ)
うこねの(の)
はさるもの(もの)
とりわき(わき)人(ひと)
ものおもひ
なぐさめ
ぬべき
ほどの
ことを
ぞ
いひ
つゞけ
たる
うちに
人(ひと)
ゝえ
もこ
ぬよ
うに
そ

そ(そ)例(れい)のやう(やう)
にうちしもとと
嫁(よめ)娶(とり)の差別(さべつ)もう
ちもまぜてそわらんと
しとゝのへ(へ)たるこそ
いとおもしろけれ
ふんのまつりよ(よ)
ハ(は)ゝ(は)

お納(をさめ)ハいとくろしもとと
細(こまか)ナ納(をさめ)うん(うん)
もの(もの)うつくしう
作(つく)らせ(せ)
給(たま)ひて(て)
惟光(これみつ)
ふんの
まつり
ハ(は)

ひとそ(そ)
なくく
うぐひ
ありけ
うつ
ゝ
ひ
りの
ぬ
ま
ん
と
ん
と
ん
と

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

別3
60
1

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用